



TITLE:

去る6月の日食に米國よりの観測隊

AUTHOR(S):

CITATION:

去る6月の日食に米國よりの観測隊. 天界 1936, 17(189): 100-101

ISSUE DATE:

1936-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167395>

RIGHT:

去る6月の日食に米國よりの觀測隊



去る1936年6月19日の皆既日食を觀測するために、今を時めく米國から出かけたのは、日本へ J. Johnson 氏1人と、ロシアへ二つの觀測隊といふ——僅々3方面に止まつたのであるが、近頃、ニユーヨークの大博物館から發行される NATURAL HISTORY といふ雑誌の10月號に Clyde Fisher

氏の載せた報告が出てゐるのを見た。之れによると、ロシアへ向つた米國隊二つのうち、一つは P. A. McNally 師の率ゐるワシントン市ジョウジタウン大學と國民地理學會との聯合隊が東歐カザクスタンのクスタナイ村に出張したが、之れは雲のために觀測は不可能であつた由。之れに引きかへ、ハーバード大學天文臺のメンゼル博士の率ゐる1隊は同じカザクスタン州のアクブラク村の東9マイルの地點に滞在し、晴天に恵まれて、豫定の觀測を遂行したといふ。

このメンゼル氏の一行といふのは、D. H. Menzel 氏夫妻(ハーバード大學天文臺)、H. Hemmendinger 氏(同)、H. Swope 嬢(同)、J. P. Boyce 氏夫妻(マサチューセツエ學院)、J. H. Cook 氏(同)、A. H. Benfield 氏夫妻(英國ケンブリヂ大學)、R. D. E. Atkinson 氏夫妻(Rutgers 大學)、W. R. Brode 氏夫妻(Ohio 州立大學)、C. Stillman 嬢(ヴァー女子大學)、I. C. Gardner 氏夫妻(ワシントン市標準局)、P. King 氏(ハーバード大學 Cruft 物理實驗室)、H. Selvidge 氏(同)、J. A. Pierce 氏(同)、E. P. York 氏(同)、M. O. L. Crowe 嬢(ニユーヨーク州立衛生局)、I. M. Lewis 夫人(ワシントン市海軍天文臺)、L. T. Day 夫人(同)及び C. Fisher 氏(ニユーヨーク大博物館ハイデン・プラネタリウム主任)の合計25人で、はるばる16000マイルの旅をして、カザクスタンのキルギス草原に出張したものであるが、幸に首尾よく目的を達して、Fisher 氏は地方時8時11分の初虧から、皆既中、天象や地象の變化に注意をし、5本の放射狀コロナ(土人は之れをソフエト國旗中の星の象徴だとして喜んだといふ)、6個のプロミネンス、金星、火星、ベイリ粒、

ダイヤモンド環、シヤド1バンド等を、見事に觀察したといふ。

此の地の皆既時刻は、9時15分20秒から、17分17秒まで、即ち1分57秒間であつた。

當時、ロシヤ國內には總計40隊の觀測群が皆既線に散布し、うち28隊はロシヤ國の學者隊であり、外國からとしては、日本、米國、佛國、英國、イタリア、ポーランド、チエコスロバキヤ、オランダ、スウェーデン、支那の各國の觀測隊が入國してゐた。

モスコウのプラネタリウムの技師長 K. N. Shistovsky 氏は北カウカソス州 Otrada Kubanskaya 村で輕氣球に乗り10000米の高さに登り、月の蔭の運動を活動寫眞に撮影した。(山本抄譯)

因みに、英國より T. E. R. Phillips 師の天文臺の R. L. Waterfield 氏の率ゐる1隊はギリシヤ國 Chios 島に滞在し、高度 $9\frac{1}{2}^{\circ}$ の太陽コロナを曝露16s で見事に撮影した由。

◆ 日本で長逝されたビルケランド氏 ◆

— 寺 町 忠 行 —

寺田寅彦氏の著“螢光板”を読んでゐて、B 教授の死と云ふ一篇中に、B 教授が、かつてエジプトのヘルワン天文臺で黃道光を觀測してゐたと云ふのにひかれ、B 教授とは誰かと久しくその人を知り度く思つてゐましたが、今度寺田寅彦氏の全集により、それがビルケランド (Birkeland) 氏であることを知りました。B 教授は1917年6月18日東京で歿したノルウェーの物理學者、天文學者、化學者で、天文に關する主なる仕事として、太陽内部の構造及び黒點に就ての理論、極光に關する實驗等があります。來る1937年6月18日で恰度歿せられてから20年になるわけです。氏の功績をたいへ、思ひ出までに。

